

第5章 私の試行錯誤

1. 教員生活の始まり

(1) 受講者2人の授業

初めての授業は、大学院博士後期課程に在籍中、ある専門学校の非常勤講師でした。複数の教科書を読み、自分で教える内容を考え、先輩の助手の方から講義資料をいただいて、さあがんばるぞと意気込んで出かけた専門学校で、待っていた受講者はたったの2人でした。少なくとも2ケタ単位の受講者を想定していた私は、肩透かしを食らってしまいました。

今の私ならば、「じゃあゼミ形式で気軽にやりましょう」と言えるのかもしれませんが、当時は授業未経験の若僧です。自分がイメージし、何度もリハーサルしてきた講義スタイルを修正することができず、2人を相手に大人数でやるような講義をした記憶があります。その後も、講義スタイルを変えることなく半年間授業を続けました。自分でも違和感を覚えながら、授業をしていた気がします。それが初めての授業経験でした。

この体験がトラウマになっているのでしょうか、私はどちらかという少人数の授業は苦手で、むしろ、学生が多ければ多いほど安心します。なんとも不思議なものです。

(2) 「しゃべるな！」と思いながら

専門学校の非常勤講師をいくつも掛け持ちでやるようになったころ、新たにある専門学校での授業を頼まれました。行って

驚いたのは、教室全体が非常に騒がしいのです。クラスの人数は50人ほどだったでしょうか。こちらが話し始めれば静かになるかと思ったら、まったくお構いなしでしゃべり続けています。「うるさい、しゃべるな！」と言いたかったのですが、性格的に生徒を怒鳴ることができず、結局おしゃべりの声に負けじと大きな声で授業を続けていました。

彼らのおしゃべりをやめさせるにはどうするかに四苦八苦しなから、半年間授業をしました。「静かにしてください」と言ったこともありましたが、あまり効果がありません。そこで考えたのは、とにかく彼らの興味を引く内容を取り入れることでした。また、教科書通りの内容を授業で話すことはやめることにしました。面白くないからです。そんな話をしたって彼らが聞いてくれるはずがありません。彼らがどんな話だと食いついてくるか、それでいて重要な概念は漏らすことなく理解させるためにはどうすればよいか、そういったことを考えるきっかけになった非常勤講師の経験でした。

(3) 「寝るな」から「寝てもいいけど何かを得なさい」へ

今でこそ、学生たちをなるべく眠らせないような工夫を取り入れた授業をある程度はできるようになりましたが、最初の頃はどうしても居眠りする学生が多く、それがとても気になりました。自分の授業は退屈なのか、どうすれば1時間眠らせないで授業できるのか、とても悩みました。もちろん、その甲斐あって、眠らせない工夫のバリエーションを次々と考案することができるようになり、それがいまの財産になっているわけです。

しかし、教員がいくら工夫したって、眠る学生はいるのです。

自分が学生だったときのことを思い出してみてください。夜遅くまで遊んだり，飲んだり，アルバイトしていたりすると，当然睡眠不足になります。授業中に眠くなってしまうのはごく当たり前のことなのです。

今では，寝ている学生に「寝るな」とは思いません。「寝てもいいけど，1時間の授業で何かを得なさい」。そんな優しい気持ちで，眠りにについている学生たちを見ていられるようになりました。

(4) 時間配分がうまくいかない

最初の頃は，1回の授業でどこまで進むかはわかりませんでした。進度の大体の目安はあるのですが，時間が足りなくなって次回に回したり，逆に予想以上に早く進んで準備した話が尽きたり，そんなことの繰り返しでした。

そのうち，1回の授業で進める区切りが見えてきました。すると，どうしても区切りまで終えたくて，授業の最後が早口になったり，話を省略したりするようになってきました。これではいけない，そう思うようになって，その後は1回の授業のところどころで経過時間を気にするようになりました。

今でも，時間配分はある程度気にしながら授業を進めていますが，授業の途中に何度も時間を確認することはほとんどありません。この回の授業はどんなペースで進めれば時間どおりに終われるかは経験的に身につけているからです。ただ，学生に問いかけたりする場合には，学生の反応に呼応したり補足説明したりしていて，少し時間が押し気味になることはあります。しかし，昔に比べれば，時間配分で大きな失敗をすることはほとんどなくなりました。

2. 学生の反応に愕然！

(1) 「それって絶対違う！」

今からかなり前のことです。心理学関係の授業で、人間の一般的心理特性について解説したときに、一部の学生から「えー、それって絶対違う！」という声が上がったことがありました。学生の中には、自分の経験に当てはまらない事実を受け入れようとしない傾向がある人がいるようです。

当時は「こちらは専門家なんだ。専門家の話を素直に受け入れよ」と思いながら、少々ムツとしたものでした。しかし、考えてみれば、その学生は自分の経験から得た既有知識を活性化して授業を聞いていたわけです。素晴らしいことではないでしょうか。学習は既有知識との相互作用で成立します。ただ、残念なことに、その既有知識は授業内容を取り込むことができるものではなかったのです。つまり、既有知識が学習を妨げることもあるということを示す一例だったということでしょう。

(2) 「よくわかんない」

資料を複数配付して、それらを見比べさせながら、その中の1つの資料の一部を口頭で訂正したことがあります。すると、何人もの学生から「よくわかんない」という応答が返ってきました。こちらとしては何もむずかしい訂正を求めているつもりはないのですが、彼らには、複数の資料を見比べながらその一部を訂正するといった行為が面倒なようなのです。学生にしてみれば、教員が完全な資料を用意するのは当然のことであり、教員の説明を聞きながら自分がそれを修正するなどということはしたくないのでしょう。学生に渡す資料はできる限り完璧なものを用意すべきであるということを感じた事件でした。

(3) 「平均ってどうやって計算するんですか」

ある大学で、実習をやった後、宿題で平均を計算させることを課しました。すると授業後、1人の学生がやってきて、「先生、平均ってどうやって計算するんですか」と聞いてきたのです。これには驚きました。カルチャーショックに近い感覚でした。もちろん、その学生には計算の仕方を丁寧に教えました。今や大学生に平均の計算方法を教えなければならない時代になったんだ、まさに、高等教育がユニバーサル段階（進学率50%を超える時代）に突入したのだと実感した瞬間でした。

3. 学生の声は神の声

(1) 「授業料返せ」

「授業料返せ」。これは私が学生からもらった最高にキツイ言葉です。そして一生忘れられない言葉になるでしょう。

心理学を専門として研究をしていると、どうしても多くの実験参加者のデータが必要になります。調査であれ、実験であれ、人間の反応データが必要なのです。そんな時、ついつい、自分の授業の受講生を対象にデータをとることを考えてしまいます。まだ教員として経験の浅いころ、ある大学で非常勤講師をしていたことですが、自分の指導している卒論生の実験データがとりたくて、その授業でデータを取ることにしました。記憶に関する研究だったので、1週目に学習、2週目に記憶テストと2週間にわたって実験をしました。いま思えば、学生はいい迷惑です。小冊子を用いて学生に覚えていることを書させる実験だったのですが、ある学生の記述データの中に実験とは無関係なことが書いてありました。「もういやだ。授業料返せ」

私の心に深く突き刺さる一言でした。絶対に忘れることのできない一言でした。もう、授業中に調査や実験は絶対にしない、そう心に誓いました。毎年、私に対して、授業内での調査実施依頼をしてくる人がいるのですが、原則として授業とは無関係の調査はお断りしています。学生は授業に対してそれなりの授業料を払っているのです。無関係なことに時間を割いては学生に失礼です。自分は学生たちが支払っている授業料に見合う授業をしているか、ときどきそのことを思い出しながら教員生活を送っています。

(2) 「声がいいですね」

教員をやってしばらくして複数の学生から言われたのが「先生、いい声ですね」でした。同じ時期に、学会発表でも聴衆の先生から発声の良さをおほめに預かりましたので、「自分は声が良いのだ」という勝手な思い込みが強くなってしまいました。

しかし、その後、その声の良さが裏目に出ます。授業後の学生からのコメントの中に「先生の声に、うとうとしてしまいます」と書かれていた時は、複雑な心境でした。良い声がいいのか悪いのか。ですが、少なくとも自分の声は武器になる、そう思ったことは間違いありません。

4. 評価をどうする

(1) 厳密にそして柔軟に

私が大学生の頃、ある先生は提出されたレポートを放り投げて遠くに飛んだ順に成績をつけているといううわさを聞きました。なんて不謹慎な先生だろうと思ったものでしたが、受講者

が多いとそうしたくなる気持ちもわからないではありません。しかし、私は成績評価をいい加減にしたことはありません。むしろ、厳密に、まめに評価を行ってきました。私の授業を選び履修してくれた学生たちに対して、やはり、きちんと公平に評価するのが当然だと思います。評価はAA, A, B, C, D の5段階（以前はAAはありませんでした）で行うことになっているのですが、複数回提出させるレポートをそれぞれ100点満点で採点し、個人ごとに平均を算出して、90点以上をAA, 80点以上90点未満をA, 70点以上80点未満をB, 60点以上70点未満をC, 60点未満をDと厳密に評価してきました。ときには全体の分布状況から区分を2点ほど下げたこともあります。ただ、どうしてもボーダーラインの学生が出てきます。たとえば59点の学生。どうするか迷います。1点足りないだけでD, すなわち不合格なわけですから。最初の頃は「不合格」としてきました。しかし、なんともかわいそうです。そんな気持ちが何年か続くと、評価も甘くなってきます。とりわけ合格・不合格の境界に関しては、合格にわずかに点が足りないのであれば、Cをつけて合格にするようになってしまいました。

最近では、1回1回のレポート提出のたびに厳密な採点をすることなく、学生の複数回のレポートをトータルで見、それぞれを柔軟に採点して評価しています。そのほうが時間的にも速いですし、何より、各学生のセメスターを通じた学習状況や学習姿勢を把握しやすいように思うからです。

（2）毎回レポートの恐怖～学生も教員も～

学生の知識定着と厳正な成績評価のために、学生に毎週レポートを課したことがあります。実習の授業ならばそのような必要



図 5-1 大量のレポートの採点に追われる

性もあるのですが、一般の講義では異例のことでしょう。やはり学生に大きな負担を強いたものだと反省しています。

実は、学生だけではなく、教員である私にとっても、非常に大きな負担でした。毎回のレポートを採点しなければならないのです。しかも、少人数の授業ならともかく、100人単位の大講義2クラス分でした。結局、毎週地道に採点することなど到底できず、採点は夏休みにずれ込んでしまいました。その時は、夏休みの数日間、大量のレポートの採点に追われた記憶があります（図5-1）。

学生からは「毎週のレポートは大変だと思ったけれど、案外何とか頑張って、良い復習にもなった」といったうれしいコメントも出てきましたが、自分の負担も考えると、大講義での「毎回レポート」は二度とできないと思ったものです。

（3）「先生、何とかしてください」

「この単位がないと卒業できないんです。先生、何とかして

ください」。成績を提出した後、学生からこんな連絡を受けたことがあります。何とかせよとはどういうことでしょうか。私は厳正に成績をつけているつもりです。単位を出せない状態だから「不合格」の成績をつけたのです。何とかなるはずがありません。

実は、正直に言うと、過去において「何とかした」ことがあります。学生は必死に訴えてくるわけです。そうなると、こちら人間です。ある課題を出し、それを遂行することを条件に、単位を認定してしまいました。しかし、そうした規則違反は何とも後味が悪いものです。

また、あるときは「何ともならない」ことを伝えたのですが、その後、その学生から自宅へ電話がかかってきたことがありました。休日の午後、しかも一度ならず、二度、三度とかかってきました。「なぜ自宅にまで」という驚きと、「いったいどうすればよいの」という困惑とで、非常に不快な気持ちになったものです。それでも、頑として救済できないことを告げましたが、最後の電話を切った後、妙な不安感に襲われたものです。その学生に恨まれ、自分の生命を脅かされるのではないか、そんな恐怖すら感じました。

現在は、授業の初回にオリエンテーションで、成績算定方法を詳しく説明し、成績提出後の救済措置は一切ないことを告げています。そのほうがお互いのためです。

(4) 最初が肝心

上述のことがあって、授業の初回のオリエンテーションはしっかりやるようにしています。オリエンテーションは重要です。この授業において何が求められているのか、授業をどのように

受ければよいのかについて、学生たちにしっかりと方向づけを行い、それと同時に評価方法を明確に説明します。また、学生たちにとっても、この授業は自分にとってメリットがあるか（ふつうは単位の取得ができるかどうか）を判断する上で、オリエンテーションは必要不可欠なのです。

シラバスやオリエンテーションにおける説明は、教員と学生との契約です。学生が授業を履修するということは、その契約が成立したと考えてよいでしょう。お互いに契約違反はしない、そんな姿勢が大切です。

5. 工夫そして工夫

(1) オープニングトーク

昔、朝のワイドショー番組で、メインキャスターが、毎日オープニングトークをしているのを見たことがあります。トーク自体は数分程度のもので、キャスターがその日その日で気づいたことや気になったことなどを述べるのですが（したがって番組の中身そのものとは直接関連性がないのですが）、ひとりの視聴者として私はなぜかそのトークに引きつけられてしまったことを覚えています。また、番組が始まる前から、今日はどんなトークだろうかと、ちょっと期待していたようにも記憶しています。

そんなことを経験したからでしょうか、自分の授業でも毎回冒頭でオープニングトークを取り入れたことがありました。学生が興味をもちそうな私自身の直近の体験談から入っていくのです。なるべく授業内容につながるようなエピソードを選ぶように努力しましたが、いつもいつもそう都合のよい出来事に遭

遇するとは限りません。授業とは無関係のオープニングトークになった日も多々ありました。

結局、オープニングトークの授業は1年しか続きませんでした。トークのネタを探すのが大変なのです。苦労して見つけてきても、そのネタは1回しか使えません。そんなことより、当の授業内容を工夫した方がよほどましです。工夫したものはそのあと何度も使えます。そういったわけで、授業内容のネタ探しに奔走するようになったのです。

(2) ネット探しに奔走

授業は「生もの」だと思っていたことがあります。学生の反応によって次回の内容を変更することはもちろん、社会的情勢の変化や大きな出来事の発生によっても、授業内容を変更すべきだと思っていたのです。この考え方の本質は今でも変わっていませんが、それを実行することはほとんどありません。なぜなら、事前にシラバスを公表しているからです。

シラバスを公表していなかった時代でも、私は授業の第1回の際に、学生に授業計画を提示していました。しかし、半期の授業展開の中で、内容を変更して授業をしたことが数度あります。社会的に大きな犯罪事件が起きた時に、予定していなかった犯罪心理の授業をしたり、サッカーのワールドカップ開催の直前には学生の関心がそちらに向いていましたので、それに関連する動機づけとパフォーマンスの心理やフーリガンの集団心理について特別講義したりしました。

ただ、突然そうした授業をするためには、1週間ほどの間に90分の授業を組み立てるための準備をしなければなりません。これは極めて大変なことでした。材料を収集し、組み立てを考

え、それでいて学術的な裏付けのもとに話を作る必要があるからです。とくに、授業材料となる映像資料の番組録画と、録画したものを授業用にどこからどこまで利用するか決定には時間がかかりました。

しかし、その努力は功を奏しました。いわゆる旬な話題ですので、学生たちの関心は非常に高く、みな真剣に聞いてくれました。また、事件や出来事に対する記憶もアクティブな状態です。授業理解度も高かったように思います。

そうした経験から、授業用の映像教材の番組録画を日ごろからまめに行うようになりました。すべてのチャンネルを同時に録画できる録画機器が発売された際には、それを購入し、利用していました。その結果、当然ではありますが、非常に多くの映像教材を所持するに至っています。しかし、実際に授業で使用している（使用できる）映像はごく一部です。

（3）1回完結型

大学での授業経験が長くなってくると、大学での授業のあり方についてもいろいろと考えるようになってきます。あり方と言っても、理念的なことではありません。半期15回の授業をどのように進めていくかについてです。具体的に言えば、講義形式の授業の場合、学生にとっては1回の授業は1トピックの学習で完結することが望ましいということです。

学生は都合で欠席することもあります。そうすると、欠席した次週の授業が前の週の続きだと、授業が理解できないことがあります。先週の内容を知っていることを前提として、授業が展開されることになるからです。理解できなければさらに授業についていけなくなり、意欲が薄れ、途中で履修を断念する、

というように、当該の学生の行く先は見えています。

教科書があって、その通りに授業が展開される場合にはそのようなことを気にする必要がないかもしれません。欠席しても教科書を読めばよいのですから。しかし、私は教科書を使いません。良い教科書がないこともあります。学生には自分の授業に出て学習してほしいからです。教科書では伝わらないことを教室の中で学んでほしいからです。教科書を読んで学習目標が達成できるなら授業など必要ありません。

一方、欠席しない学生にとっても、1回完結型の授業の方がわかりやすいはず。たとえば、前回の内容で忘れていたり、思い出せないことがあるかもしれません。また、何より、授業は90分間のまとまりをもった談話です。その90分で教員が伝えたいこと、それを支える材料のすべてが、全体としてまとまりをもって構成される必要があります。一部が前回の残りだったり、一部が次回に回されたりすると、全体のまとまり感がなくなります。

以上のことから、私はすべての授業で、原則として1回完結型を実践しています（1つの科目で1回だけ例外があります）。それは授業を受ける学生の立場に立った工夫なのです。もちろん授業科目によっては、1回完結がむずかしいものもあるでしょう。しかし、連続性がある授業であっても、それぞれの回において、なんらかのテーマ性をもたせるような工夫をすれば、学生にやさしい1回完結型の授業を作れるのではないかと思います。

（４）授業ペーパーの提出・まとめて返却

近年、大学の授業ではコメントペーパー（リアクションペー

パー、あるいはミニットペーパーなどと呼ばれることもあります)を提出させ、それをチェックする教員が増えてきました。授業に対する学生の生の声を聞くには良い方法だと思います。

一方、小学校などでは、頻繁に子どもたちにノートを提出させ、それをチェックしていらっしゃる先生をよく見かけます。子どもたちに授業内容をしっかりと学ばせ定着させたいからだと思います。

私は、これらの両方を同時に行うことを考えました。毎回、授業開始時にノートとコメントを記入するための用紙を配付し、授業中はノートをとらせ、授業後にコメント欄にコメントを書かせて提出させるという方式です。配付する用紙はA4判1枚で、ノートを取るためのスペースと授業に対するコメント欄が分かれています。ノートを取るためのスペースには、その回の授業概要が目次のような形式で記されているだけで、そのほとんどが空白です。私はこの用紙を授業ペーパーと呼んでいます。図5-2に、授業ペーパーの例を示します。

ビジュアル・コミュニケーション			学別	空欄番号	業名
1. ビジュアルの力	2. わかりやすさが肝心	3. レイアウトに気を付ける			
(1) 興味をひきつける	(1) 大きく、はっきりと	(1) 静かに注意			
	(2) 背景は白黒				
(2) 理解を助ける	(3) 相手が理解可能な	(2) 視線の移動は少なく			
	(4) 箇字的な情報を引き起こすな	(3) 言語情報は構造化して、メリハリを			
(3) 記憶に残す	(5) ムダを削げ	(4) 図表性にも留意せよ			
授業に対するコメント					

図5-2 授業ペーパーの例

英語表現の世界 (教科書) 第 2011/12/28

ビジュアル・コミュニケーション

学級 学級番号 番号

1. ビジュアルの力

(1) 興味をひきつける

① エッセイ 2枚の巻頭は 2人に1人の男子学生
何に引き込まれるか。(→ 男子学生が多い。見た目の女性らしい)

② 2人の法則 Beauty (文才) Beast (知性) Baby (感性)
(ABCの法則) 2人の法則 → Animal, Beauty, Child

③ CHEの法則「困った時」

④ 理解を促す

⑤ 知識を整理

⑥ 記憶の強化

⑦ 読者の感情

⑧ 読者の感情

⑨ 読者の感情

⑩ 読者の感情

⑪ 読者の感情

⑫ 読者の感情

⑬ 読者の感情

⑭ 読者の感情

⑮ 読者の感情

⑯ 読者の感情

⑰ 読者の感情

⑱ 読者の感情

⑲ 読者の感情

⑳ 読者の感情

㉑ 読者の感情

㉒ 読者の感情

㉓ 読者の感情

㉔ 読者の感情

㉕ 読者の感情

㉖ 読者の感情

㉗ 読者の感情

㉘ 読者の感情

㉙ 読者の感情

㉚ 読者の感情

㉛ 読者の感情

㉜ 読者の感情

㉝ 読者の感情

㉞ 読者の感情

㉟ 読者の感情

㊱ 読者の感情

㊲ 読者の感情

㊳ 読者の感情

㊴ 読者の感情

㊵ 読者の感情

㊶ 読者の感情

㊷ 読者の感情

㊸ 読者の感情

㊹ 読者の感情

㊺ 読者の感情

㊻ 読者の感情

㊼ 読者の感情

㊽ 読者の感情

㊾ 読者の感情

㊿ 読者の感情

2. わかりやすさが肝心

(1) 大きく、低く書く → フォントの大きさ

① 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

② 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

③ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

④ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑤ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑥ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑦ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑧ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑨ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑩ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑪ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑫ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑬ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑭ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑮ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑯ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑰ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑱ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑲ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

⑳ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉑ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉒ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉓ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉔ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉕ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉖ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉗ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉘ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉙ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉚ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉛ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉜ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉝ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉞ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㉟ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊱ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊲ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊳ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊴ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊵ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊶ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊷ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊸ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊹ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊺ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊻ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊼ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊽ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊾ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

㊿ 1行の文字数を減らす → 読者の負担を減らす

3. レイアウトに気を付ける

(1) 横線に書く → 見やすくなる

① 横線に書く → 見やすくなる

② 横線に書く → 見やすくなる

③ 横線に書く → 見やすくなる

④ 横線に書く → 見やすくなる

⑤ 横線に書く → 見やすくなる

⑥ 横線に書く → 見やすくなる

⑦ 横線に書く → 見やすくなる

⑧ 横線に書く → 見やすくなる

⑨ 横線に書く → 見やすくなる

⑩ 横線に書く → 見やすくなる

⑪ 横線に書く → 見やすくなる

⑫ 横線に書く → 見やすくなる

⑬ 横線に書く → 見やすくなる

⑭ 横線に書く → 見やすくなる

⑮ 横線に書く → 見やすくなる

⑯ 横線に書く → 見やすくなる

⑰ 横線に書く → 見やすくなる

⑱ 横線に書く → 見やすくなる

⑲ 横線に書く → 見やすくなる

⑳ 横線に書く → 見やすくなる

㉑ 横線に書く → 見やすくなる

㉒ 横線に書く → 見やすくなる

㉓ 横線に書く → 見やすくなる

㉔ 横線に書く → 見やすくなる

㉕ 横線に書く → 見やすくなる

㉖ 横線に書く → 見やすくなる

㉗ 横線に書く → 見やすくなる

㉘ 横線に書く → 見やすくなる

㉙ 横線に書く → 見やすくなる

㉚ 横線に書く → 見やすくなる

㉛ 横線に書く → 見やすくなる

㉜ 横線に書く → 見やすくなる

㉝ 横線に書く → 見やすくなる

㉞ 横線に書く → 見やすくなる

㉟ 横線に書く → 見やすくなる

㊱ 横線に書く → 見やすくなる

㊲ 横線に書く → 見やすくなる

㊳ 横線に書く → 見やすくなる

㊴ 横線に書く → 見やすくなる

㊵ 横線に書く → 見やすくなる

㊶ 横線に書く → 見やすくなる

㊷ 横線に書く → 見やすくなる

㊸ 横線に書く → 見やすくなる

㊹ 横線に書く → 見やすくなる

㊺ 横線に書く → 見やすくなる

㊻ 横線に書く → 見やすくなる

㊼ 横線に書く → 見やすくなる

㊽ 横線に書く → 見やすくなる

㊾ 横線に書く → 見やすくなる

㊿ 横線に書く → 見やすくなる

① 読者の感情

② 読者の感情

③ 読者の感情

④ 読者の感情

⑤ 読者の感情

⑥ 読者の感情

⑦ 読者の感情

⑧ 読者の感情

⑨ 読者の感情

⑩ 読者の感情

⑪ 読者の感情

⑫ 読者の感情

⑬ 読者の感情

⑭ 読者の感情

⑮ 読者の感情

⑯ 読者の感情

⑰ 読者の感情

⑱ 読者の感情

⑲ 読者の感情

⑳ 読者の感情

㉑ 読者の感情

㉒ 読者の感情

㉓ 読者の感情

㉔ 読者の感情

㉕ 読者の感情

㉖ 読者の感情

㉗ 読者の感情

㉘ 読者の感情

㉙ 読者の感情

㉚ 読者の感情

㉛ 読者の感情

㉜ 読者の感情

㉝ 読者の感情

㉞ 読者の感情

㉟ 読者の感情

㊱ 読者の感情

㊲ 読者の感情

㊳ 読者の感情

㊴ 読者の感情

㊵ 読者の感情

㊶ 読者の感情

㊷ 読者の感情

㊸ 読者の感情

㊹ 読者の感情

㊺ 読者の感情

㊻ 読者の感情

㊼ 読者の感情

㊽ 読者の感情

㊾ 読者の感情

㊿ 読者の感情

図5-3 ある学生の授業ペーパー（ノートとコメント入り）

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、このペーパーは第1章でお話した先行オーガナイザーの役割も兼ねています。A4判1枚にしたのは、今日の授業の全体像を一目で見渡せるようにするためです。そのため、どうしてもノートスペースやコメント欄に十分な余裕をもたせられません。しかしながら、たいへんありがたいことに、学生たちはがんばって小さな字でノートやコメントをたくさん書いてくれます（図5-3）。

また、コメント欄に書く内容として、授業の感想ではなく、「授業内容に関係するエピソードや身の回りのことを具体的に挙げる」ように指示しています。第1章で述べた自己生成精緻化による理解の深化と、第3章で述べた具体例の生成による役立つ知識にするための予行演習効果をねらっています。

もちろん、この授業ペーパーは学生のノート（すなわち学習の成果）ですので、学期末には学生ごとに毎回のノートを綴じて本人に返却します。ちなみに、学生にとって、自分のノートがまとめられて返ってきたときの驚きと喜びと満足感はかなり大きなものです。半期の努力が目の前にまとまって現れるわけですから、それは誰だってうれしいでしょう。感情の揺さぶりにもなります。当該の授業はそれで終了ですが、次の別の授業や学習への動機づけになるにちがいありません。

(5) レポート課題成果集の作成

学生が提出するレポートは、学生たちの学習の成果です。よく書けているレポートを読むと教員側もうれしくなりますし、他の学生たちにも読ませてやりたくなります。そこで、良いレポートを集めて冊子を作ることを試みました。

レポート課題は「異なるタイトルを与えることで、理解される内容が大きく変わってしまうような文章を作ってみましょう」。第1章で例として挙げた文章（9頁参照）を自分自身で創作する課題です。学生たちの創造力が試されます。レポート課題提出後、各学生は他の学生がどんな作品を作ったのか、知りたくてうずうずしていました。

なにしろ200人を超える学生が受講している授業です。全員のレポートは到底載せることはできません。ある年は、私が

ひとりで選定して、全体の約1割強の良い作品を掲載しました。またある年は、2人のアシスタントに手伝ってもらって、私を含めて計3人の評価に基づいて、全体の約2割弱の作品を掲載しました。

出来上がった冊子に、学生たちはまず自分の作品が載っていないか探します。載っていなかったとしても、他者のすぐれた作品を興味深そうに読みます。それはまさに、学習成果の提示がさらなる学習の動機づけになりうることを証明した瞬間だったように思います。

6. アシスタントの活躍

(1) 優秀なTAがいれば

ティーチングアシスタント (TA) の制度ができてから、多くのTAに授業の補助をお願いしてきました。たいがい、自分の研究室の院生を使うのですが、それでも、有能な仕事をしてくれたTAもいればそうでなかったTAもありました。優秀なTAがいると、教員の負担は大幅に減ります。いちいち指示しなくても、自分で判断して動いてくれるからです。しかしながら、そうでないTAの場合は指示したことしかしてくれませんでした。むしろ、TAを動かすためにいろいろ考えることが増えて(それでも動いてくれなくて)、逆に心理的負担が増えたこともあります。

(2) SLA 通信

東北大学にはSLA (Student Learning Adviser) という制度があります。これは、おもに学部3年生～大学院生の有志

が、全学教育を受ける学部1～2年生の学習をサポートする活動です。SLAの活動形態には、個別対応型支援や自主ゼミ支援など複数の形態がありますが、私が利用させていただいたのは授業連携型の支援活動です。すなわち、SLAの学生に、私の担当する授業に入ってもらい、授業運営の補助的な業務から、受講学生の学習サポートに至るまで、多様な支援活動をしてもらいました。

その中でもっとも効果があったと感じているのは、毎回の授業後、SLAが授業内容をまとめ、さらに学生からのコメントで代表的なものを抽出して、A4判2ページ（両面印刷）の便りを作成し（これをSLA通信と呼んでいました）、翌週、学生全員に配付するという活動でした。

SLA通信には、自分たちが書いたコメントのいくつかが取り上げられているので、学生は自分が書いたコメントがないか探し、ほかの学生がどんなコメントを書いたのか興味深く読む姿が見られました。また、SLAから学生へのメッセージが含まれていたり、SLAが自分で調べた授業の発展的内容も含まれていたりして、学生にとってはSLAを身近に感じ、加えて授業内容をより深く理解できる、非常に効果的な学習補助教材になっていたと思います。これもSLAという優れたアシスタントがいればこそできる学習支援活動です。SLAに感謝です。（参考URL：東北大学SLA <http://www.sla.dc.tohoku.ac.jp>）

7. 理想は高く

(1) 脚本家と俳優と舞台監督と

私にとって、授業は1つの作品です。そして、その作品を

制作するために、脚本を書き、当日は教壇という舞台に立って、自分に指示を出しながら、脚本に沿って教員役を演じているわけです。言うならば、脚本家であり、俳優であり、舞台監督でもあるのです。一人でこんなにたくさんの職業（しかもやってみたい仕事ばかり）を経験できるのはこの上ない喜びです。授業という作品制作に携われるのは、教員ならではの特権だと思っています。

作品は、それに関わるすべての人が最高のパフォーマンスを発揮してこそ素晴らしいものになります。1つでも欠けたら良い作品にはなりません。脚本が悪ければそれを書き換える必要があるでしょう。俳優として十分に動いていなければ稽古をしなければなりません。舞台が面白くなければ舞台監督として対策を立てなければなりません。一人三役はたいへんですが、良い作品作りを目指してがんばっていき、とてもやりがいのある仕事だと思っています。

（２）最適な授業空間

同じ授業を２つのクラスで担当することが多いのですが、同じ内容の講義をしても、一方のクラスでは学生の反応がとても良いのに、もう一方のクラスでは反応が悪いということをししばしば経験します。不思議なものです。

しばらくの間は、そんなこともあるかと思っていたのですが、最近になって何となくわかってきたことがあります。それは、反応が良いクラスは教室の大きさにふさわしい数の学生が受講しているのに対して、反応の悪いクラスは教室の大きさに比して学生の数が少ないのです。どうやら、そのクラスサイズにふさわしい授業空間というものが存在するようです。ちょうど良

い空間に教員と学生が存在していると、その場の雰囲気というものができあがるように感じます。

そこで、今年は人数が少なかったクラスをより適切な大きさの教室に変更してもらいました。そのおかげで良い雰囲気です授業運営ができています。最適な授業空間を求めて、可能であれば教室を変更することも教員の役割だと思います。

(3) 全員が満足する授業をめざして挫折

学生全員が満足する授業をしたい。そんな気持ちを抱いていた時があります。学生による授業評価が始まって、自分の授業の評価が数字で出てくるようになりました。多くの学生は、5段階で5をつけてくれるのですが、やはり4や3の評価の学生もいます。それがくやしくて、何とか全員が5をつける授業をしてやろうと意気込んでいた時期もありました。

しかし、100人を超える大人数の授業で、全員が5をつけるなどほとんど不可能に近いものです。こちらがいくら工夫しがんばっても、何人かは4以下の評価をつけてきます。

今は、全員が満足する授業はできない、と開き直りに近い心境です。もっとも、ある教授法がある学生に向いていても、別の学生には不向きであることは当然生じる現象で、すべての学生に最適な教授法は存在しないことは昔から言われていることです。適性処遇交互作用と呼ばれています。でも、いつかは偶然でも良いので全員から5をもらいたいものです。

(4) 他者の評価で成長する

かなり前になりますが、私の授業を見学されたある先生から「オーソドックスな良い授業だ」と言われたことがあります。

その先生は、話が上手で、話術で学生たちをひきつけることができる方です。私は話術に長けているわけではありませんし、どちらかといえば人前で話すのが苦手な人間です。ですから、面白い話の連続で学生の笑いをとったり、アドリブで授業を展開するなど、到底できません。事前に準備をしっかりと、計画通りに話す、いわゆるオーソドックスな授業しかできないのですが、そんな授業であったとしても、他の先生からお褒めの言葉をいただけたのはとてもうれしい経験でした。

近年になって、やはり私の授業を参観された若手の先生に「先生のような授業をめざしています」と言われたことがあります。たいへん光栄なことです。偶然、同じころ、非常勤をしている別の大学で、受講生が「指導教員の先生に、『邑本先生の授業は受けたほうがいいよ、僕が目標にしている授業をする先生だから』と言われました。だから履修しました」と言ってくれました。第三者を経由して自分が評価されていることを知るとさらにうれしいものです。これも人間の心理です。

人は他者からの評価によって自己概念を形成することがあります。他者から言われたことを受け止め、それを自分のイメージとして確立するのです。したがって、他者から良い評価を受けるとそのような自分のイメージができ、それを維持するためにがんばろうという気持ちになります。逆に悪い評価を受けた場合には、そのような自分のイメージ（自己概念）を払拭するために努力することもあるでしょう。多くの大学で、教員相互による授業参観が行われると良いと思います。

(5) やっぱり授業はコミュニケーション

教員生活が長くなってくると、学生との年の差を感じるよう

になります。そして、当然のことではありますが、話題がかみ合わなくなったり、ネタが通じなくなったりして、授業がむずかしくなってきました。やっぱり授業はコミュニケーションだと痛感しています。

残念ながら、ふだん、受講学生と同じような年齢の人と深く接することはほとんどありません。今の学生たちがどんなことに興味があり、何を考えどのように生きているのか、もっと知りたいと思っています。頼みの綱は、研究室所属の数人の大学院生と、高校生の娘くらいでしょうか。

お互いを知り、お互いに歩み寄るための努力をすること、それこそがコミュニケーションを円滑にする必要条件だと思います。それは教員と学生の関係でも同じです。もちろん、大学の授業においては、教員と学生は、1週間に1回の、しかも半期限りの人間関係にすぎません。また、大人数の講義では、主として教員から学生への一方向のコミュニケーションがほとんどです。しかし、そのような人間関係、コミュニケーション関係であったとしても、我々教員は、学生とのコミュニケーションがうまくいくよう、できる限りの努力をしていく必要があると思っています。